

■ワーグナー [デ・フリーヘル編曲] /楽劇「ニーベルングの指環」オーケストラ・アドヴェンチャー

ワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」はご存知のとおり、神々と人間をめぐる壮大なストーリーで、4日間かけて上演される。ワーグナー歌いとも呼ばれる強靱な喉を持つ歌手たちがオーケストラの豊饒な響きに伍して、奇想天外な物語を演じていく。人や情景を示すライトモチーフが縦横にめぐらされ、何度も繰り返され、また、前の出来事を説明するシーンもあるので、上演日が分かれても話の展開を見失うことはない。オーケストラの書法も充実していて、一度、この音楽になじむと、その魔力に抗うことはむずかしい。

この楽劇の音楽をコンサートでも聴きたいというリクエストはワーグナーの生前からあって、100年を超えて多様な試みがなされてきた。今日、演奏されるのは1991年にオランダ放送フィルハーモニー管弦楽団の打楽器奏者だったヘンク・デ・フリーヘルが編曲し、92年にエド・デ・ワルトによって初演された版である。特徴としては、序夜から順を追って第3日までを扱いつつ、オーケストラの音楽が充実している部分に焦点を絞って、あとはバツサリと削除していることだ。歌唱のパートを楽器でなぞることはせず、ワーグナーの管弦楽の楽譜を整理してつないでいく。それによって、オペラそのものと切り離しても楽しめる音楽となっている。「ワルキューレの騎行」にしても「魔の炎の音楽」にしても、あるいは「ジークフリートの葬送行進曲」にしても、キャラクターの明瞭な楽想はそれ自体、聴きごたえ十分だ。

全体を概観すると、序夜「ラインの黄金」から前奏曲／ラインの黄金／ニーベルハイム／ヴァルハラ、第1日「ワルキューレ」からワルキューレたち／魔の炎、第2日「ジークフリート」から森のささやき／ジークフリートの英雄的行為／ブリュンヒルデの目覚め、第3日「神々の黄昏」からジークフリートとブリュンヒルデ／ジークフリートのラインへの旅／ジークフリートの死／葬送行進曲／ブリュンヒルデの自己犠牲となっている。

あらためて1時間ほどの全曲を聴いてみると、ワーグナーの繊細な音楽作りに耳が引き寄せられる。艶やかで厚みのある音響が滔々と鳴り響くシーンに対して、楽器がユニゾンで奏でる、あるいはごく少数の楽器が鳴っているといったシーンも少なくないのだ。楽劇に親しんでいる人ならオペラのシーンをあれこれ思い浮かべるのも楽しいし、そうでない人でも豊かな主題の展開と再現が織りなす構成の妙に魅了されるにちがいない。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：ピッコロ、フルート3（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ3、イングリッシュホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン8（ワーグナーチューバ持ち替え4）、トランペット3（鉄床持ち替え2）、バストランペット、トロンボーン4（コントラバストロンボーン持ち替え1）、チューバ、ティンパニ2、グロッケンシュピール、バスクラリネット、タムタム、鉄床、トライアングル、シンバル、ハープ4、弦五部

※スコア上の表記